

生活の芸術化、芸術の生活化 21世紀22世紀

The Art-ification of Life, and the Life-ification of Art, 21st Century and 22nd Century

藤田治彦(神戸芸術工科大学 教授)
FUJITA Haruhiko(Kobe Design university)

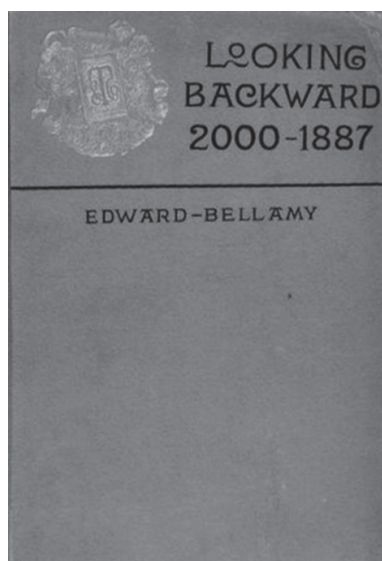
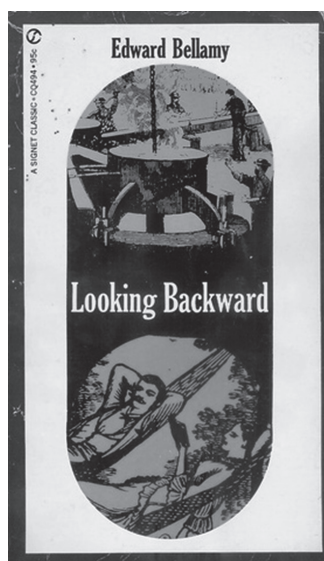
今回は講演タイトルを「生活の芸術化、芸術の生活化 21世紀22世紀」としています。私は3年前に大阪大学の名誉教授になりましたが、今年から神戸芸術工科大学に招かれ、再び教育の現場に立つようになりました。そのような年齢ですから、私の人生は「21世紀」までです。でも会場の皆さんはどうなのかというと、学生の方の多くは21世紀の終わりくらいまで生きるでしょうし、そのうち数名はおそらく「22世紀」まで長生きするでしょう。今回は、そうした時代観も踏まえながら、生活は芸術になるか、そして芸術は生活になるか、ということをお話していきたいと思います。

ベラミーが書く21世紀、モリスが書く22世紀

19世紀アメリカの作家エドワード・ベラミーの著作に、1888年にボストンで出版された、2000年から1887年を顧みるという設定の小説『かえりみれば(“Looking Backward”)』という作品があります。これ【図1】はその小説の、ハードカバーとソフトカバーの2つの異なる表紙です。左(ソフトカバー)の表紙をよく見てみると、この本の概要が端的にわかります。

上のピンクに見えているのはどこかの工場です。そして人々が工場で労働している。これが「1887年」、あるいは出版された1888年くらいの様子です。それに対して、この“Looking Backward”にあたるのが、下のグリーン色の絵です。ここでは2人の男女がゆったりと横になっている。これが「2000年」です。2000年というと、我々の今生きている現在に近いですね。こういう小説を、エドワード・ベラミーが書いたわけです。

この小説の主人公は、ジュリアン・ウェストというボストンの男性です。不眠症に悩んでいたウェストは、医師に催眠術をかけてもらうのですが、あまりに深く寝入ってしまい、2000年の同じボストンの街で目を覚ますわけです。そしてその街で様々なものを見聞きしていくと、やはり自身が元々生きていた1887年とは大きく変わっていると実感します。例えば、労働は本当に少なくなっていて、この物語の2000年頃は45歳くらいで定年を迎えるような時代になっています。また市内各地には、5分、10分の距離になんでも揃う分配所が設けられている。これは言うならば社会主義、あるいは共産主義的なシステムがアメリカ全土を支配する世界で、非常に統制



【図1】

William Morris (1834 – 1896) 『ユートピアだより・やすらぎの時代 *News from Nowhere or an Epoch of Rest*』 1890年『コモンウィール』連載、加筆し1891年に単行本として刊行。



【図2】

されています。ベラミーはそれほど詳細に一つひとつを描写しているわけではありませんが、他にも、もはや現金は使っておらずクレジットカードのようなもので支払っていたり、いつでも音楽を聴くことができる電気音楽なるものがある、などと、私たちの今の社会を的確に予測しているのです。

ここでベラミーの『かえりみれば』と、イギリス近代デザインの先駆者などと言われるウィリアム・モリスの著作『ユートピアだより：もしくはやすらぎの一時代』を比較してみましょう。『かえりみれば』は、当時からアメリカだけでなくヨーロッパでも注目されており、モリスもこれを読みます。しかしモリスはこの小説に疑問を感じて、1890年に彼自身が編集していた社会主義同盟の機関紙『コモンウィール（公共の福祉）』に『ユートピアだより』を連載しました。この二つを比較してみましょう。ベラミーの『かえりみれば』が描いた2000年のボストンは、私たちが生きるこの時代に近いですね。労働が最小限で、キャッシュレス化しているような世界。対してモリスの『ユートピアだより』が描くのは2100年代、22世紀のロンドンです。モリスは労働量が最少限になるとか、なくなるといったことを大事だとは考えておらず、ベラミーのように書いていません。ただ、労働の「苦痛」が最少限になった未来を書いています。労働が楽しみであって、ものづくりは皆でやっているような未来です。現金どころかクレジットカードも不要で、誰もが互いに好きなもの、得意なものをつくったり、あるいは演じたりして、無償で提供している。それが『ユートピアだより』の世界なのです。

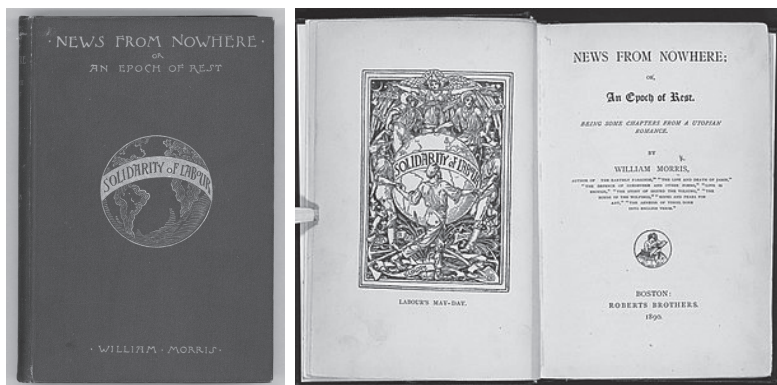
「良いものづくり」と「良い生活」

モリスの家はテムズ川のほとりに建っていました。その家

の東には、奇しくもベラミーの『かえりみれば』執筆時期にあたる1887年に完成した、ハマスミス・ブリッジがかかっています。これは当時最新のサスペンション・ブリッジですが、大層な装飾が施されており、モリスはこれを嫌っていました。そんな自宅周辺のいくつかの建物を借りて、モリスは1891年に私家版印刷所ケルムスコット・プレスを立ち上げます。そこから次々と出版物を手がけていきますが、先述の連載をまとめて加筆し、1893年に単行本として刊行された『ユートピアだより：もしくはやすらぎの一時代（*News from Nowhere or an Epoch of Rest*）』もその一つでした。この図【図2】はその本の最初の見開きです。タイトルのすぐ下に「CHAPTER I. DISCUSSION AND BED.」とありますが、ここでこの物語をもう少し紹介しましょう。

『ユートピアだより』の主人公はモリスの分身とも言える「ウィリアム」という人物です。ウィリアムはある日ロンドン市内の社会主義連盟で未来についてディスカッションした後、自宅に帰ってベッドで眠ります。翌朝目を覚ました主人公は、すぐ近くのテムズ川の河畔まで下りていき、若い漕ぎ手がいるボートに乗ります。そして眠気覚ましにとテムズ川に飛び込んでひと泳ぎしてからボートに戻ると、あのモリスが嫌ったハマスミス・ブリッジがなくなっていて、フィレンツェのポンテ・ヴェッキョのような橋に変わっているんです。それに驚いたウィリアムは、ボートを漕ぐ男性に家の近くまで戻ってもらい、ありがたうと言って、船賃を渡そうとポケットに手をつ突っ込むわけですが、小銭は銀の粉のようになってしまっている。その世界では既にお金というものが無い時代になっていたのです。ボートの船賃もなければ、この後ウィリアムは2100年代のロンドンの街中を歩くのですが、欲し

News from Nowhere, Boston, 1890 最初の単行本はボストンで1890年に海賊版刊行。



【図3】

いと思えばそれを受け取ることができる。素晴らしい果物屋や、あるいは素晴らしい織物でも、すべての人がお互いにものでづくりや演技や行動を提供し合う世の中になっているのです。しかし、この本の挿絵でも描かれるように、建物や家具や道具は元の時代とそう変わらない。モリスは近代デザインのパioneerとされていますが、実際には新しいデザインを気にしていなかったわけではありません。モリスが大切にしていたのは「良いデザイン」であり、「良いものづくり」、そして「良い生活と人生」だったのです。

この図【図3】は1890年にボストンで刊行された『News from Nowhere』です。ベラミーの『かえりみれば』がアメリカだけではなくヨーロッパでも注目されたように、モリスが『コモンウィール』で連載していた『ユートピアだより』もボストンに影響を与えており、同書がロンドンで刊行されるよりも一年早く、ボストンで海賊版として刊行されていたのです。表紙には地球の上に「労働の連帯 (SOLIDARITY OF LABOUR)」という文字がかかった絵が描かれており、最初の見開きに掲載された口絵では、それをさらに労働者が手を取り合って囲み、踊っているような姿が描かれています。ベラミーが書いた労働やものづくりがなくなるような世界ではなく、モリスが書く労働のあり方に共感した人物がこの海賊版を出版したのだらうと思えます。

機械のアートとクラフト

さて、ボストンには今も活動するアーツ・アンド・クラフツ協会「The Society of Arts and Crafts of Boston」が1897年に設立されます。モリスは1896年に死去しますが、造形芸術家であると同時に文学者、詩人でもあったモリスの死はアメリカに

も報され、新聞や雑誌などでもモリスの特集が掲載されました。そしてこれを契機に、アメリカでアーツ・アンド・クラフツ運動が広まって行き、各地にアーツ・アンド・クラフツ協会が設立されます。サンフランシスコのみ例外的にモリス死去前の1894年に設立されていますが1897年にボストンとシカゴ、その後はニューヨーク、オハイオ州デイトン、ロサンゼルスと続いていきます。ここで注目したいのは、シカゴの協会創設メンバーにフランク・ロイド・ライトが名を連ねている点です。

フランク・ロイド・ライトは1901年、この協会で「The Art and Craft of the Machine」という講演を行います。機械のアートとクラフト。「Arts」ではなく「Art」と単数形にしていることにイギリスのアーツ・アンド・クラフツ協会のメンバーなら非常に抵抗を感じたでしょうし、モリスの思想に最大の影響を与えたジョン・ラスキンなどは機械/工場によるものづくりを疑問視していました。しかし、ヨーロッパからアメリカに渡った人々にとってアメリカはあまりに広大で、自国のように優れた職人がたくさんいるわけでもなく、むしろ機械によるものづくりには積極的で、ライトの講演もアーツ・アンド・クラフツ協会では十分共感されました。ライト自身はモリスの思想やイギリスからのアーツ・アンド・クラフツ運動には共感し、これを好んでいましたが、20世紀最初の年の象徴的なこの講演で、アートとクラフトの未来は機械にある、というふうに論じているのです。

この機械によるものづくりとは、直線的な仕事を言います。例えば、ライトは柱や梁、あるいはボードをつくってこれを徹底的に使用しますが、その代表的な例としてニューヨーク州バッファローの《ダーウィン・マーチン邸》やシカゴの《フ

レデリック・ロビー邸》が挙げられます。ウィリアム・モリスの自邸《レッド・ハウス》に見られるように西洋の赤レンガは本当に暖かく美しいのですが、ライトも赤レンガやステンドグラスを使用しており、いかにアーツ・アンド・クラフツ運動を継承しているのかがわかります。またライトは浮世絵を好んで収集し、日本の造形芸術に非常に惹かれており、アーツ・アンド・クラフツ運動だけではなく、日本の数寄屋造りのような味わい深い建材を用いたり、数寄屋のような深い庇を用いた水平重視の建物をつくりました。《フレデリック・ロビー邸》などはまさにその代表例で、プレーリー・スタイルと呼ばれた1900年代制作のこれらのライト建築はヨーロッパにも影響を与えました。しかし、後にインターナショナル・スタイルなどと呼ばれるようになる、ヴァルター・グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエ、ル・コルビュジエらの近代建築が台頭してくることで、ライトは時代遅れの建築家と見なされその第一黄金時代は終わりを迎えます。その後第二の黄金時代が到来するまでの間は、彼自身の様々な生活上の問題や世界恐慌が重なり、しばらく地獄の時代が続きます。

様々な枠組みを超えた芸術のあり方

やがて復活を遂げたライトの代表作の一つは、1936年着工の《落水荘 (Falling Water)》でした。ライトは《落水荘》で初めて、インターナショナル・スタイルに通じるフラットルーフの建築を設計しました。第二の黄金時代を迎えた彼はこの時70代。そして、90代まで非常に多くの作品を手がけていき、現代の脱構築主義の先駆ともいえる《ソロモン・R・グッゲンハイム美術館》を設計します。ライトはこの美術館の建設中、頻繁に現場に通っては、施工業者に常に助言しながら進めて

いきました。この時にはライトは90歳過ぎだったわけですが、デザインしただけではなく、共につくっていったといえるわけです。ライトは1959年に死去しますが、その少し後に完成したこの美術館。ここには絵画、彫刻、建築など、様々な造形芸術を一度に鑑賞できる大きなアトリウム（内部吹き抜け空間）が備わっていて、一番上からこのアトリウムの周りの螺旋形のスロープを下って作品を見て行く構造となっています。いつでもアトリウムに目を向ければ、美術館中をパノラマ的に見渡すことができます。現代アートには従来の絵画や彫刻とは異なるインスタレーションのような作品もありますが、この《ソロモン・R・グッゲンハイム美術館》は、様々な芸術の共通性と違い、あり方を示しながらあらゆる芸術作品の枠組みを超え、そして建築も造形芸術の一つであると示す美術館だと言えることができるかと思います。また、豊かな労働やものづくりの未来を垣間見ることができる美術館だと言えることもできるでしょう。

一方、スペインのビルバオに1997年に開館した《ビルバオ・グッゲンハイム美術館》は、フランク・ゲーリーが手がけた、同じ脱構築主義の代表的な作品と言われます。しかし、これは非常に美しい建物ではありますが、実は建物の上の半分はほとんどが装飾だと言われています。対してライトの《ソロモン・R・グッゲンハイム美術館》は、非常に機能的かつ実用的に考えられていて、無駄な部分はほとんどないと言っている。90歳を過ぎたフランク・ロイド・ライトによる、相当徹底した建物だったといえるのです。脱構築主義の先駆たるフランク・ロイド・ライトと、現代のフランク・ゲーリーを比較して、この変化を私たちはどのように感じ、どのように考えたらいいのだろうか。そんな見方もできるのではないかと思います。